

28. 痔瘻により発見された肛門癌の1例

三枝一雄 (三枝病院)
布村正夫, 小田奈芳紀 (千大)

肛門癌は比較的稀な疾患であり、痔疾患と関係があるものが注目されている。われわれは痔瘻より擦過細胞診により、肛門癌を発見し切除した症例について報告する。患者は66歳、女性、主訴は排便困難、15～16歳頃、肛門周囲膿瘍を切開、3か月前より排便困難あり来院、3時に痔瘻を発見し、細胞診により癌と診断し得た。注腸造影、内視鏡より肛門癌として腹会陰式直腸切断術を施行した。病理組織学的診断は中分化腺癌であった。

29. 腸重積で発症した横行結腸癌の1例

森嶋 友一, 宮崎 彰, 安倍己紀男
瀬戸屋健三, 大和田耕一
(住友重機浦賀)

注腸造影、大腸内視鏡及びCTにて結腸癌による腸重積と術前に質的診断し得た症例を経験したので報告した。腸重積症の質的診断に注腸造影、内視鏡検査は必須だが、本症例の如くCTにて特徴的所見を示す場合があり、CTの普及した今日CTは術前診断率の向上につながると思われた。また大腸重積症では腺癌によるものが多く、手術に際しては腫瘍細胞の播種及び腸管穿孔の危険を考え、整復せずに腸切除することが肝要と思われた。

30. 痔核に対するレーザー手術の検討

水谷正彦, 橘川征夫, 千見寺徹
藤沢秀樹, 土屋 信 (千葉市立)

当科では、昭和62年2月より、炭酸ガスレーザーを使用した痔核根治手術を12例経験した。レーザーの最大利点は無血的切開と蒸散であり、手術時間は短かく、出血量もわずかであった。また、術後の浮腫は著しく少なく、このため、術後の疼痛も軽微であった。レーザー装置は高価であるが、痔核手術を簡素化し、患者の苦痛を軽減できることを考えれば、これから広く利用されるべきであると考えます。

31. 大腸ファイバースコープにおける選択的洗浄細胞診の有用性

増田 裕 (増田病院)

方法：大腸ファイバースコープの鉗子孔より、ポリエチレンチューブを挿入し、生食200ml位を、狙撃的に直

接病巣部へ噴射、洗浄と、その洗浄液を直ちに回収し、遠沈、塗抹、染色、検鏡した。

まとめ：①本法は、大腸に狭窄があり、内視鏡や生検が不十分な場合有効である。②本法は、潰瘍性大腸炎に伴う癌の存在の情報を提供出来る可能性を示唆している。③本法の有用性は期待出来る。

32. 膵管内進展を示した膵癌の1例

南 智仁, 山本 弘 (都立府中)

症例は66歳女性。慢性膵炎にて、外来通院していたが、ERCP施行時に、開大した副乳頭より粘稠な膵液が排出され、拡張した副膵管内に粘液塊がみられた。また膵液細胞診にて癌陽性であった。病理組織学的には、主膵管、副膵管および一次分枝の膵管上皮に沿って進展する乳頭腺癌で、いずれの部位でも基底膜を越えた膵実質への浸潤はなかった。以上より、本症例は、粘液産生膵癌と考えられた。

33. 小膵癌の1例

諏訪敏一, 小林国力, 磯野敏夫
近藤公一 (大宮日赤)

急性膵炎症状で発症した小膵癌を経験したので報告した。症例は57歳男性。主訴は左背部痛、左季肋部痛。血中、尿中アミラーゼ値が1036mU/ml, 10925mU/mlであった。ERCPで尾部の主膵管のTapering像、血管造影で大膵動脈の狭窄像、脾静脈の圧排像がみられた。膵体尾部、脾合併切除施行。切除標本で10×7mmのduct cell ca. well diff. tubular typeであった。ly1 v d(+), so ew(+), scirrhus type, INF γ 。肉眼的進行度は、T₁, N(-), S₀, R_{p0} V₀ Stage Iであった。

34. Ductectatic type の膵嚢胞腺腫の1例

佐野隆久, 田口 勝, 松山迪也
足立英雄, 宮原弘次, 竹内 修
(深谷日赤)

患者は74歳女性、主訴は心窩部不快感、血中アミラーゼとトリプシンの軽度上昇を認めた。US, ERCPで、主膵管の軽度拡張と膵頭部に10×12mm大の副膵管と交通を有するブドウ房状の嚢胞を認め、内部には粘液による透亮像が存在した。血管造影で綿花様腫瘍濃染像を認めた。嚢胞摘出術を行ない、迅速組織診・細胞診で悪性所見はなかった。病理組織で上皮は高円柱状、一部立方状で軽度の異型性と乳頭状増殖を認め、多房性の拡張膵管様腺管が見られた。